世田谷村日記

石山修武

六月九日

一時過、なんとか昨日が今日の連続ではないようにありたいと思う毎日だが、仲々そうはならない。午前中、午後共研究室で雑用に追われる。十七時グリーン・アロー小川氏石山研小特集入稿終了。十八時過、栃木のビルダー西村氏、室内塩野君来室。新宿で会食。

六月十日

九時、電機屋地下現場で打ち合わせ。十三時過教室会議に久し振りに出る。十五時博士論文内公聴会。研究室ＯＢ野口君の論文受理される。公聴会の後、臨時人事小委員会。幾つかの案件を相談する。世田谷村に帰り、エックスナレッジの原稿、イサム・ノグチとＢ・フラー書く。二十二時四〇分八枚書き終える。やはり書かなければいけない。書くと新しいアイディアが生まれるものだ。解ってはいるのだが、しんどいので時々逃げたくなるのが本当のところなのだ。

六月十一日

九時前杏林病院。十一時半新宿駅地下で、本わさびそばの昼食。上野へ。十二時四〇分寛永寺境内根本中堂の軒先で休む。上野の森には実に雑多な魔者が眠っている。雑誌陶磁郎の取材で国立博物館、細川家永青文庫、国立近代美術館工芸館、日本民芸館を見て廻る。十八時修了。少しばかり疲れたけれど、面白かった。現物を見て廻るのは嫌いではない。代々木上原で編集者、カメラマンと分かれ、千代田線で根津に向かう。十八時二十五分根津、約束の時間にまだ間があるので駅近くのカフェでコーヒーを一杯。そして小休する。十九時前はん亭へ。十九時難波和彦先生、鈴木博之先生と参集。歴史と技術研究会のこの後、つまり近い将来について討議する。二十一時修了散会。その後難波さんと二十二時過まで、小川町でビールなどすすり二十二時半お別れ。友あり遠方より来たる、ではないが、久し振りに友人に会ってビールをする。マア、それ位の嬉しさはあってもよい。昔はこの感覚を義理と人情と言った。銭金抜きの交流は今では稀だが、このベースが無いと、人生は極めてあやふやなモノになるのを知っている。初期モダニストは、この感覚を表に出すのを嫌った。弱い人間であるときめつけられるのを恐れたからだ。しかし、一人の人間の生き方を考えるならば、それは独人の熟考と小集団の交わりの連続に尽きる。人間が生きるのに最小限に必要なのはスペースでも場所でもなく、コミュニケーションなのだ。と少し酔った頭で考えながら二十二時四十分、京王線笹塚駅あたりで考えている。二十三時過には世田谷村に辿り着けるであろう。